

「大河ドラマ：鎌倉殿の13人」 埼玉県民として押さえておきたい"常識" (上) 武蔵武士団の系譜とその実像

メインストリート・マネジメント・リサーチ合同会社 代表・地域経済アナリスト 松本 博之

はじめに

大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、昨年の「青天を衝け」に続いて、埼玉県ゆかりの人物が多く描かれています。中でも「武蔵武士団」の中心的な人物である畠山重忠や頼朝の側近の一人の比企能員などが登場しています。鎌倉幕府の成立には埼玉県内を本拠とした彼ら、「武蔵武士団」の活躍があったことは、まぎれもない歴史の事実であります。大河ドラマをより一層楽しむため、また埼玉県民として押さえておきたい“常識”についてまとめてみました。今回は武蔵武士団の歴史的な流れとその実像を紹介します。

1. 平氏の武将たちが作った鎌倉幕府 —— 坂東八平氏と武蔵武士団

「武蔵武士団」について触れる前に、当時（鎌倉幕府成立前）の東国における武士団の形成について概観したいと思います。当時は桓武平氏の流れをくんで現在の関東各地に勢力を伸ばしていった「坂東八平氏」といわれる武士団が武蔵、相模や上総、下総の各国におりました。

歴史を紐解きますと、9世紀末ごろ、高望王（^{たかもち}桓武天皇のひ孫）が平氏を賜って臣籍を下り、その後上総介として東国に赴きました。高望王の五男である平良文が武蔵国（現在の熊谷市）を本拠とし、坂東八平氏の一つとなる「秩父平氏」の祖となりました。その後、良文の子孫は武蔵国だけでなく相模や房総半島など関東一円で繁栄し、坂東八平氏として“豪族的な”強力な武士団を形成したのです。

「坂東八平氏の顔ぶれ」

- 房総平氏：①千葉氏 ②上総氏
- ③秩父平氏（畠山氏、河越氏、江戸氏等）
- 相模平氏：④三浦氏 ⑤土肥氏 ⑥梶原氏
- ⑦大庭氏 ⑧長尾氏

（坂東八平氏の中で①～⑥までが頼朝の鎌倉幕府成立に参加しました）

大河ドラマでも描かれておりましたが、坂東八平氏のなかで、色ゴシックで表記した6氏が中心となって頼朝の挙兵に（多少の時期のずれはありますが）参集し、平家滅亡へ向けて大きく動いていきました。彼らは血筋から言えば平氏であったわけですが、歴史の皮肉とは面白いもので源氏の棟梁を「武家の棟梁」として担いで武家社会を作っていたのです。なお③の秩父平氏のみが、畠山氏、河越氏、江戸氏等と書きましたが、この理由については後で触れたいと思います。

2. 武蔵国の特徴と武士団の誕生 —— 武蔵国の地政学的位置

歴史的には律令体制が整備されると21郡からなる武蔵国が設けられ、東山道に属することになります。その後、宝亀2年（771年）「続日本紀」では、武蔵国は「東山道」から「東海道」へ配置換えとなりました。東海道は相模国で分岐し、武蔵を経て下総に達する道が開かれていたため、「延喜式」（10世紀に編纂された格式）には武蔵国が東海道の主線であり、安房、上総両国は傍路となつたと書かれています。武蔵国は、現在の関東地方の中で最大規模で、山と川（河）と海（東京湾）も所有していました。また長年

にわたり、朝廷による陸奥国征伐へも兵站基地の役割を担っていました。

武蔵国の特徴としては、今で言う牧場、“牧”（名馬を生産するため兵部省所管の官牧や左右馬寮所管の勅旨牧^{ちよくしまき}）が多く設置されていました。これらの牧からは、毎年 50 頭以上の良馬を東山道を使い、朝廷へ献上していたと言われていました。これら勅旨牧が所領化されていき、牧の別当だった一族が牧を基盤とし武士化しました。武蔵七党（児玉七党）や秩父牧の別当となる秩父氏など武蔵武士は、牧場の管理と騎馬戦法を会得して成長・発展していったと言われていました。

—— 武蔵武士団の形成

武蔵武士団の系譜（詳細は後述）を見ますと、いくつかのパターンが見られます。まずは、関東へと流れて来た軍事平氏です。彼らは世代を経ることで、新しい拠点を求めて移動し広い武蔵国の中に点在していきます。

また“牧”を守っていた一族は、牧を中心として開墾をし、経営と支配を維持するために実力を保つ必要から、自ら武装し、家人や郎党を集めて武力化していきました。あるいは国司として武蔵国へ赴任し、任期が終わった後も土地に根を下ろし、地方豪族となり武装化していったというパターンもあります。

武士団は、農業経営地に適していた北部は利根川（当時は葛飾郡から東京湾に注いでいた関東一の大河、利根川の下流が太井川と呼ばれていた）、中部は荒川（熊谷付近から東南へ方向を変え隅田川となって東京湾に注ぐ）、南部は多摩川の周辺に集まっています。このような地形は、小武士団の独立維持を容易にしましたが、反面で武士団を大きく統合する上での困難さを示していました。

現在の埼玉県東南部の大きな平地は、関東平野の広大な原野、湿地帯で 11、12 世紀はほとんど開発が進んでいませんでした。関東平野の耕作地はほとんどが江戸時代以降に形成され、鎌倉時代の土木技術では開墾や灌漑はできず、開発が難しかったのです。

—— 源平の間で揺れる武蔵武士

源氏は東国武士との関与については、平氏と比較して遅れを取っていましたが、前九年・後三年の役を通じて、武蔵国内で「武家の棟梁」として、その地位を確立した源頼義・義家が強い影響力を及ぼし武蔵武士団を支配下に置き、ある意味で「主従関係」を作り上げていきました。ことに後三年の役後に、朝廷からの恩賞が出なかった東国武士に対して、義家が“自らのポケットマネー”から恩賞を与えたこと（※諸説あり）は、その後の頼朝挙兵の時の武蔵武士団を含めて東国武士の対応に大きく影響をしているとも言われています。

頼義・義家以来の源氏が勢力圏を作り上げる時に基本は武的権力による人的支配、いわゆる主従関係的な支配の実現でした。東国に源氏が直接土地を持つのではなく、主従関係の支配下において、軍事組織を強化していったのです。

12 世紀半ばになると河内源氏の嫡流で若くして東国へ下向した義朝が、相模国の鎌倉を本拠に相模、下総などの在地武士団の再組織を進めていました。一方で同じ頃、義朝の弟、義賢は上野国に居住して勢力の拡大を図っていたのです。そして二人が武蔵国を巡って衝突しました。久寿 2 年(1155 年)8 月、大蔵館の合戦です。

武蔵武士団の立ち位置を見ると、武蔵国留守所総検校職（秩父平氏の中で総領が務める役職）を継承していた秩父重隆（河越氏の祖）は、源義賢を自分の大蔵館に迎え入れており、義朝と対決することになりました。また秩父平氏の中で河越氏と主導権争いをしていた畠山氏は、義朝側に与しました。

結果は鎌倉を拠点として、相模国から武蔵国へと勢力を伸ばそうとした兄、義朝（頼朝の父）の長男、悪源太義平によって源義賢は秩父重隆とともに殺されました。これにより秩父一族、武蔵（児玉）七党に属する武蔵武士団の多くが義朝の配下となり、武蔵国は源氏の勢力下となりました。

—— 武蔵国、平清盛の知行国へ 迫られる大転換

その 4 年後、平治の乱(1159 年)が起きます。平

清盛による源義朝の討伐によって、源氏はほとんどその命脈を絶たれたのでした。11世紀中ごろよりの頼義・義家以来の源氏の当主を武家の棟梁と仰いで「源氏の譜代の御家人」としていた多くの坂東武士、とりわけ武蔵武士団は頼るべき棟梁を失ってしまうのです。武蔵国は清盛の知行国となり、歴代の武蔵守には平家一門が任じられました。武蔵武士団は、自分たちの在地支配を保つためにも「新しい政治権力者」であり、唯一「武家の棟梁」となった平家、平清盛の支配下に臣従する他にありませんでした。

武蔵武士の多くが平家の被官となってその支配に屈することになり、平氏の家人となって、京都大番役など勤める立場におかれたのです。頼朝の挙兵まで平家の統治は20年余り続くことになるのでした。

3. 武蔵武士団の類別とその特徴

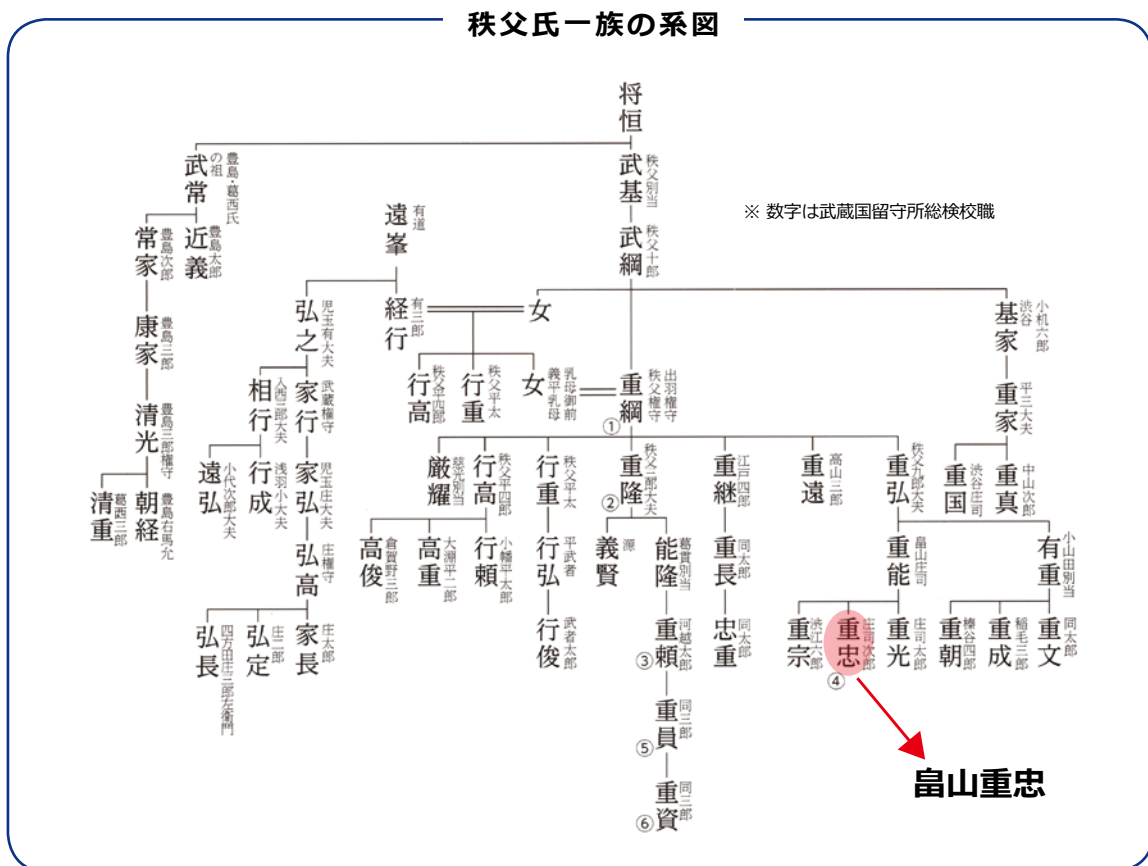
次に武蔵武士団をその成り立ちや形態から3つに類別して、その特徴を紹介します。

—— 豪族的武士団「秩父一族」

先述したように、桓武平氏の流れをくんで関東各地に勢力を伸ばしていったいわゆる「坂東八平氏」で、武蔵国を中心に勢力を伸ばしたのが秩父氏です。秩父氏は平（村岡五郎）良文の孫、将恒が武蔵権守となり、秩父郡中村郷（秩父市）に本拠を置き、秩父盆地一帯を拓いて秩父氏を名乗ったことから始まります。将恒の子、武基は秩父牧の別当となり、その子、武綱は前九年・後三年の役で源義家に従い武功をあげ、秩父地方を地盤とする武士団を形成していきました。

さらに武綱は清和源氏と主従を結んでいた「武蔵七党」の横山党や児玉党と婚姻関係を結ぶことで、東海道と東山道とを結ぶルートを開点として武蔵武士団を形成していきました。

このルートが後の鎌倉街道上道となっていくのです。また秩父氏は秩父牧を基盤に発展し、武綱の子重綱のときに「武蔵国留守所総検校職」となり、



(出所：各種資料をもとに筆者作成)

こくが
国衙機構の中で一定の地位を確保することになります。

この重綱の系統から、男衾郡畠山（現深谷市）の畠山氏、入間郡河越荘（現川越市）の河越氏を始め、稲毛、榛谷、小山田、江戸庄（千代田区から台東区）の江戸氏などを輩出します。また将恒の子、武常の系統からは豊島氏や葛西氏を輩出していきます。一応、同族的な結合を維持しながらも、12世紀初めのころには、それぞれの家が武蔵国の各地で独立的な地域の支配を実現していきました。

—— 中小武士団「武蔵七党」（児玉七党）

12世紀の中頃には、台地・丘陵地帯の原野を開発して多くの中小の武蔵武士団が誕生しています。彼らは同族的な結びつきを基本に武蔵国の各地へ分布を広げ、「武蔵七党（児玉七党）」と呼ばれるに至ったのです。一般的には、横山、猪俣、野与、村山、丹、児玉、西の七党となりますが、それらは必ずしも固定されたものではないとされています。（野与党の代わりに私市党を入れることもある）

武蔵七党の各党の内容は右図の通りです。彼らも小規模ながら、源氏の御家人となっていたのです。

—— 京都から来た武蔵武士たち

次に“その他”の部類に入る京都から来た武蔵武士を2人紹介します。実は彼らは、京都で源氏の御家人だった一族で、武蔵武士団の中で「鎌倉殿の13人」に入っている武士です。

1人目は比企氏です。比企氏は頼朝の父、義朝の時代から仕えており、京都で武門の棟梁として活躍をし始める義朝の傍にいました。久安3年(1147年)に頼朝が生まれると比企氏の妻、比企局が頼朝の乳母となります。ここから比企氏の源氏との深い関係が始まります。

平治の乱で義朝が敗れ、頼朝が伊豆へ配流となると、比企氏は領地であった武蔵国比企郡に移り住み、頼朝挙兵までの20年間にわたり頼朝への経済的な支援を続けるのでした。比企局の甥で、当主となった比企能員は頼朝、そして二代將軍頼家の最側近として働きます。しかしながら、1203年、北条氏と

「武蔵七党」の中心地と北武蔵における主な分布

横山党	多摩郡横山（八王子市）を中心に北武蔵では大里・埼玉郡に分布
猪俣党	横山党の支族 北武蔵では児玉・大里・比企郡に分布
野与党	埼玉郡に分布
村山党	多摩郡村山（東村山市）を中心に、北武蔵では入間郡に分布
丹党	秩父・児玉・比企・入間郡に分布
児玉党	児玉・秩父・比企・入間郡に分布
西党	南武蔵に分布
私市党	主に埼玉郡に分布

（出所：各種資料をもとに筆者作成）

の権力闘争に敗れ、比企能員は北条時政によって誅殺されてしまいます。

2人目の足立遠元（生没不詳）は、武蔵国足立郡を本拠とした武士で、源氏譜代の家臣として、頼朝の父、義朝に加勢して平治の乱で戦っています。頼朝が挙兵し武蔵国に入ると、誰よりも早く足立遠元の領地を安堵していることから、源氏との関係の深さがうかがい知れます。彼が平氏追討に加わったという記録はなく、文字の読み書きができない武士の中で、その才能を買われ、鎌倉に留まって頼朝を補佐していたものと思われま

—— 中小武士団の悲哀、熊谷直実の活躍

平家打倒に向けた各地での戦で武蔵武士の活躍は目覚ましいものがありました。最後に武蔵武士団の中で、特に後世に名をはせている熊谷次郎直実・直家親子に触れたいと思います。彼らは、郎党などはほとんどいない「個人事業主」だったと言われています。そのため自らの所領を守るため自分自身が命を懸けて戦って手柄を立てなければならなかったのです。その結果、頼朝から直接「本朝無双の武士」と讃えられることとなりました。

（次号、(下)「鎌倉殿の13人と武蔵武士団」として、「武蔵武士の鑑」と謳われた畠山重忠を中心に紹介します。）